

総ふるさと化の意味すること

—小林秀雄の「故郷を失った文学」の現代的意義—

長谷部正*

目次

- | | |
|--|--|
| 1. はじめに | 1) 高度成長がもたらした総ふるさと化
(=総郊外化) |
| 1) 背景と目的 | |
| 2) 理念としての西欧近代の特徴
—小林敏明に依るまとめ— | 2) 近代化が達成された1970～80年代 |
| 2. 「青春」, 「郷愁」の観念の終焉
—戦後Ⅰ: 1960年代 | 3) 総ふるさと化 (=総郊外化) 時代の文学 |
| 1) 戦前から戦後へ—食生活史から見る | 4. 小林秀雄の「故郷を失った文学」にみる
喪失感の由来—戦前: 1930年代 |
| 2) 明治以降の大転換期として1960年代 | 1) 都会起源のエリートの増大 |
| 3. 近代化達成の象徴としての総ふるさと化
(=総郊外化) —戦後Ⅱ: 1970～80年代 | 2) 小林秀雄における故郷喪失の意味 |
| | 3) 諸近代の近代 |
| | 5. むすびにかえて |

1. はじめに

1) 背景と目的

筆者は、長谷部正(2006)、長谷部正(2008)で歌謡曲を素材としながら、経済成長にと
もなう都市、郊外、農村の風景の変化といわゆる「故郷」との関連について考察してきた。
考察の結果、1960年代の経済の高度成長を経て、1970～80年代に入ると、それまで出身地
として愛着があり、懐かしい思い出として想起しうる対象として議論されてきたのとは異
なる故郷の姿が浮き彫りになった。それは、一言でいえば、今や農村だけでなく都市さえも、
つまり日本国中どこもかしこも故郷と呼びうる状況である。

本稿では、文学および文芸批評に焦点を当てることによりこの現象を再考することを目
的とする。

さて、文芸批評家の小林秀雄の作品に1933年発表の「故郷を失った文学」がある。その
中で、故郷や小さい時の生活の記憶が薄く、それが不安材料になって来ているが、それ故
に西洋文学が理解できる時期に至ったという趣旨のことを書いている。故郷は、そこを棄
てて都会に出てきた青年にとって生き生きと思い出すことのできる現実であるのに対して、
都会人にとってはそのような故郷はないという意識が強い。このように故郷という観念は、
都会人の青年および農村出身の青年の双方にとって厄介なものである。さらに、後述のよ
うに故郷という観念は、小林のような当時のエリート青年にとって近代とは何であったの

*東北大学大学院農学研究科教授

かを問うことと深いかわりを持つものであった。

故郷喪失の問題に関しては、上記の小林秀雄の議論に限らず、多くの論者によって考察されてきた。本稿で参考とする文芸批評（前田愛、三浦雅士、奥野健男）、社会学（中村牧子、高橋勇悦）、歴史学（成田龍一）、さらには哲学（小林敏明、佐藤正英）においても議論されている（カッコ内は小林秀雄に言及する論者）。第2節以降、独自の視点からの青春論と同時に本稿作成のきっかけとなった故郷論をも展開している三浦雅士の主張について検討する。三浦は、明治期前半から小林秀雄のようなエリート青年の中心的なテーマであり続けた「青春」やそれと結びついた「故郷」等といった観念が、第二次世界大戦後の経済の高度成長を契機として、その役割を終えるに至ったことを論述している。三浦の主張について前掲諸氏（括弧内）の論考を参考に検討し、それが持つ現代的な意義について考察する。なお、本稿では、第2次世界大戦を基準に戦前（1940年代前半まで）、戦後Ⅰ（1940年代後半～60年代）、戦後Ⅱ（1970年代以降）に時代を区分して議論する。

2) 理念としての西欧近代の特徴 —小林敏明に依るまとめ—

次節以降の議論に先立ち、ここでは、廣松渉を論じた小林敏明の『廣松渉—近代の超克』を参考にして、明治以降の日本社会の目標であった西欧近代の理念の特徴を次の3点にまとめておく。

(1) 共同体からの解放と国民国家の形成

経済発展による農業生産力の上昇に伴い、農村の共同体の中から析出された人々は、農地のような生産手段を持たないがゆえに、労働力として自己を売り、その対価を得ざるを得なくなった（共同体からの解放と労働力商品化）。このような労働力の売買を基底にして、経済を運営する方式を採用しているのが産業資本主義である。この資本主義下で、自らを労働力として販売すること以外に生活の糧を入手できない人々を統括し、彼らが生活する社会の安全を維持し、かつ、一定の規律（ルール）に基づいた社会生活を可能にするために制度としての国民国家が形成される。

(2) 機械論的世界観に基づく合理的精神

産業資本主義体制の下では、効率的な生産方法に基づき利益を追求する企業が、経済活動を牽引する基本的な経済組織である。企業で働く人々は、効率的生産を支える者であるため仕事（労働）を通して合理性の精神を獲得する。合理性あるいは効率性に基づいて技術の革新が図られるが、それを支えているのは、個々の部品から全体を組み立てることができるとする機械論的な世界観である。新商品の開発や機械に体化された新たな技術を開発するための科学技術の研究への投資の結果、技術革新が誘発されて経済発展の原動力となるため、技術によって社会や経済が拡大・発展するという進歩の考え方が生まれてくる。ここに、過去から現在、現在から未来への経済主導による進歩のイメージを形成し、かつ、合理化（効率化）を具体的に示す指標の一つとして時計などに見られる線型的な時間の概念も確立する。さらに、合理性（効率性）の観念は、生産現場のみならず人々の生活全般をも覆うようになる。

(3) 個別化と主客分離の認識図式

産業資本主義体制の経済運営に依拠した国民国家で合理的精神を身に着けた個人が自由に活動できるためには、各個人が一個体として自立することが必要となる(個別化)。これを可能としたのが、哲学のみならず、自然科学においても採用された主観(主体)と客観(客体)とを分離する認識図式である。

以上の3点が満たされていれば目標として西欧的な近代化は達成されたものとみなすことにする。

ここで、故郷意識と明治以降の社会・経済の動向を左右してきた進歩の考え方を上記の特徴との関連でみておく。本稿では、成田龍一が述べる「同じ時間を過ごし、同じ空間を見、同じ言葉で話し、同じ感情を持つという意識」(成田龍一, 2000, 19)を故郷意識として捉えて、これを持たない、あるいは持てないことを故郷喪失意識とする。故郷という観念は、本稿で注目する青年エリートのうち農村出身者が生まれ、育った地域=共同体を基にして成り立つものであり、また、一種地域の連合体でもある国民国家とも結びついている。このように故郷意識ないし故郷喪失意識は、西欧近代の理念の特徴の「(1)共同体からの解放と国民国家の形成」に関わる。また、「青春」という言葉は本稿で課題とする明治以降の近代化に重ねた場合、青年が一人前の大人へと成長していくこと、それが進歩であるとする見方につながっている。これは、技術革新によって社会や経済が拡大・発展するという進歩の考え方は、西欧近代の理念の特徴である「(2)機械論的世界観に基づく合理的精神」を背景として出てくる。明治以降の近代化の一連の出来事を可能にさせた精神的な基盤となるのが近代人としての主体の確立(個別化)であり、かつ、近代的主体が自らの立脚点から客観的に対象の認識法の獲得であり、これらは「(3)個別化と主客分離の認識図式」として捉えることができる。

2. 「青春」、「郷愁」の観念の終焉 一戦後Ⅰ：1960年代

1) 戦前から戦後へ 一食生活史から見る

最初に、第2次世界大戦の前後の歴史的な関連について、会社で働く夫に対して、地域社会との関係を最低限に保ちつつ、家庭内食生活の伝統の継承もなしに新たな家庭を築かざるを得なかった1960年代に母親となった女性達に焦点を当てて議論してみよう。この点で注目されるのが、岩村暢子の詳細な調査に基づく昭和の食生活史に関する考察である(注1)。岩村が調査の対象としたのは、1960年代に親となった女性達とその母親達である。両世代を調査すると、まず、母親達が、特異な食生活体験を持っている世代である。母親達が娘時代を送ったのは、第2次世界大戦中であり、経済的にも窮乏していたため、「どの人もその家庭本来の食をまっとうには経験していない。」(岩村暢子, 2010, 49)しかも、敗戦によって経済は壊滅的な打撃を受けたのみならず、アメリカ軍の占領政策によって価値観は皇国思想から民主主義思想へと激変した。食生活の伝統の継承もなく、信ずるに足る価値観がない状態で成長した親に育てられたために、1960年代に母親となった女性達は、

食生活のみならず生活全般に関して手本となるモデルを持たずに大人になって結婚し、新たな家庭を築くという事態に直面した。親世代の干渉を拒みつつ、家事の省力化に役立つという名目で販売されるようになった家電製品を活用して自分たちの世代の生活を作っていくという新たなライフスタイルがみられる。親世代の食生活等のモデルを継承せずに新たな家庭を築くという点では同じような体験をしているため、母娘はゆるやかだが実質的なつながり（＝連続性）を保っているという、新たな家族の在り方が出現した（第3節で述べるようにこうした家族の在り方は、人々の個別化現象や家族・地域・学校等の子供達に対する規制力の弱体化につながる）。食生活という限定付きではあるが、岩村の分析を参照し、戦中・戦後を生き抜いた母親達から1960年代に結婚し、子供を産んで親となった娘達へとゆるやかであるけれど、決して無視できないつながり（＝連続性）を基に生活史を築いていることをみた。ここまで岩村の議論に即して「1960年代」という言葉については説明抜きで用いてきたが、次に、この言葉が持つ固有の意味についてふれてみる。

2) 明治以降の大転換期として1960年代

第2次世界大戦後、見田宗介が述べるように情報技術の進展もあって情報による需要開発が一般化して、少なくとも先進国では一定水準の所得が獲得できる人々にとって消費によって欲望を充足することが自己目的化した。このため見田が述べるように情報化によって促される〈充溢し燃焼しきる消尽〉することを意味する〈消費〉によって欲望の充足ははかれる、いわば「欲望全開」とでも呼んだほうがよい行動が常態化したため、生産過程での労働主体のみならず、消費面での欲望主体を管理する社会へと変わった。見田はこのような社会を〈情報化/消費化社会〉と呼ぶ（注2）。

1950年代後半からの経済の高度成長を契機として、日本では都市人口が農村人口を上回り、農村社会から都市社会に大きく変化した。これは、社会そのものが変わっただけでなく、次項で述べるように永らく日本を理解する上での基本的な観念の役割を終わらせるほどの意味を持ち、まさに明治以降の日本社会にとっては大転換期と呼んでいい出来事である。

なお、1960年代には、故郷喪失者の大量出現という事態が生じていたことを中村牧子が分析している（注3）。中村によれば、大企業の種々の庇護の下で働く多くのサラリーマンは、彼らの家庭ために立地した新興の商店街やスーパー、デパートを利用し、従来からある周辺地域の社会関係と切れた空間で生活をしていた。このことは、徐々に周辺地域の商店街や人間関係を弱体化させることにつながる。一方、集団就職列車で上京した中卒者がその典型である地方からの単身流出者は、弱体化せざるをえない周辺地域の中で不安定な生活に甘んずるしかない生活を強いられた。

これらのことが歌謡曲に反映されている。歌謡曲は、時代をさかのぼるが関東大震災から2年後の1925年に開始され、1933年から一般化したラジオ放送を通して徐々に注目されるようになる。そして、第2次世界大戦後、ラジオの民間放送がはじまり、さらにテレビが導入された1960年代から歌謡曲が興隆を示す。そして、演歌が、アウトローの歌から

故郷や郷愁などとして表現される「日本人の心」を歌うものとして脚光を浴びることになった（注4）。1950年代から60年代にかけて故郷（ふるさと）の崩壊現象は一気に進行する一方で、フランク永井の「有楽町で逢いましょう」（1957年）で、東京へのあこがれが唄われた。

3) 「青春」, 「郷愁」の観念の終焉

さて、本稿の課題である故郷喪失に関わる問題に目を転じてみよう。三浦雅士の『青春の終焉』は、小林秀雄に着目した青春論なのだが、故郷論としても優れている。三浦の議論の独自性は、日本の近代が、小説も含め、「青春」という観念を巡って展開されてきたことを主張する点である。そして、青春だけでなく、故郷と結びついている「郷愁」も近代日本の知識人が囚われてきた観念であるとみなす。三浦の郷愁についての説明は次の通りである。

「人は、扉を開けた瞬間に春の夜の匂いに圧倒されて身動きができなくなるような存在である。一気に押し寄せる夥しい春の記憶に打ちのめされてしまうような存在なのだ。これが強烈になれば、現在の方が逆に非現実的になってくるのは当然であろう。夢のなか、記憶のなかを泳いででもいるようにしか感じられなくなるのも当然だ。さらに進めば、人生のすべてはすでに何もかも終わってしまっていて、ただ追憶のなかを生きているような気持ちにさえなってしまう。既視感が病理に接する瞬間である。

郷愁は、このような感情に対して設けられたひとつの方法、ひとつの秩序のようなものだ。（略）」（三浦雅士，2001，293）

いわば「故郷」と共に用いられてきた「郷愁」は、「青年」, 「青春」における夢や記憶の源泉であり、切っても切り離せない関係である。

「（略）若者たちは、故郷という観念がもたらす感情の、その時間と空間の魔術、帰ってみれば野も山も変わらないが人は変わっていたという、変化と不変化のその妙に、人生の凝縮された姿を、世界の神秘、時間の神秘を、見たのである。青年という観念も、故郷という観念も、世界と人生に向き合うその向き合い方の様式に他ならなかった。それは、自分を自分自身という物語の主人公として見るための距離であり方法であった。」（三浦雅士，2001，291-292）

故郷と結びついて起こる異様な興奮となって示される「郷愁」は、「青年」や「青春」における夢や記憶の源泉であり、切っても切り離せない関係である。このことに関連して、三浦は「青春とは非日常が日常となる時空、祝祭の時空の別名である」（三浦雅士，2001，113）と述べる。明治初頭から1960年代までの進歩を求めた青年の疾駆は、絶え間ない「非日常」であり、「祝祭」の日々という形容こそふさわしい。

ところが、経済の高度成長によって1960年代には都市社会が出現し、次節で述べるように日本国中のほとんどが故郷（ふるさと）、あるいは郊外と化すことになった。このため故郷と結びついた「郷愁」の観念およびそれと密接な関係にある「青春」の観念は、明治以降文学の主要なテーマであったが、その役割を終了（終焉）せざるを得なかった。

次節では、新たな時代に突入した日本社会の特徴について、風景という一側面から接近してみる。

3. 近代化達成の象徴としての総ふるさと化（＝総郊外化）—戦後Ⅱ：1970～80年代

1) 高度成長がもたらした総ふるさと化（＝総郊外化）

日本社会は、経済の高度成長を経て、生活面でも合理性(効率性)の精神が浸透し、商品選択において利便性を求めるようになったこともあり、郊外の道路沿いには「欲望全開」を推進するロードサイド・ビジネスが軒を並べて立地する現象が全国的傾向となり、結果として風景の画一化が促された。かくして1970～80年代に至ると故郷の代名詞であった「田舎」と「都会」とは区別できなくなり、どこもかしこも故郷（ふるさと）、あるいは郊外と化すという意味で、総ふるさと化、あるいは総郊外化の状態になった（注5）。歌謡曲を例にとると、どこもかしこもムラだと歌うゆずの「岡村ムラムラブギウギ」（1997年）が、今日の故郷の姿を端的に表現している（藤井淑禎，2003，167-176）。

さらに、1980年代に入ると、グローバリゼーションにとめない東京は国際金融都市として再生する。東京の定住者にとってもそれまで見慣れたはずだった景観が「未知の空間」と化す。この東京の景観の変化について、加藤典洋（2000）は「東京の発見」と表現している。尾崎豊はこのような東京を「町の風景」（1983）として生きていく若者を唄っている。そこには多くの人々が生まれ育つようになった都会もまた故郷（ふるさと）であるという時代背景が反映している。

本稿では三浦雅士の議論に即して、日本の近代が「青春」の観念を巡って展開されてきたが、それは1960年代を境に終焉したことをみた。いわば成長神話のベースとみなされた「青春」が終焉したことは、この時期に経済が趨勢的な成長の時期から安定期ないし停滞期に入ったことに対応している。

2) 近代化が達成された1970～80年代

1970～80年代の総ふるさと化（総郊外化）により風景が画一化した。これは、地域の固有性が喪失することでもある。同時に、地域の規律が失われ、家庭内の食事で個々人の献立が異なったり、一人で食べたりというように人々の個別化現象も進み、子供達は家族・地域・学校等の従来の第1～3空間から第4空間（コンビニ、街）へ流失する（注6）。一方、農村に目を向けると、区画整備等の圃場整備事業の推進によって、その風景もまた画一的なものへと変貌をとげた。しかも、財政投資によって整備された農地の一部は、近郊化で宅地等へと転用される。こうして観念のみならず、風景の面でも徐々に故郷（ふるさと）が衰退し、「郷愁」と「青春」との関係が持つ影響力が消失した。

近代の精神が共同体からの解放の上に成り立つとすれば、共同体の象徴である故郷との対決やその必要がなくなることが、近代化の証一つであると考えられる。総ふるさと化、あるいは総郊外化は、1970～80年代に至って明治以降の宿願であった西欧近代を示す理念の一つである共同体からの解放をようやく達成したことを象徴する言葉である。既述のよ

うに人々の合理性(効率性)の追求や個別化現象も一般化し、第1節で説明した小林敏明のまとめた理念として規定した西欧近代が達成されたといえる。

このように日本が明治以降の念願であった近代社会が全国レベルで成立した1980年代に入ると、故郷や郷愁を歌う演歌を含む歌謡曲は衰退の一途を辿ることになった。

3) 総ふるさと化(=総郊外化)時代の文学

自らが子供の時期には近所に「原っぱ」があり、そこでの自己形成の記憶が「原風景」を形作っていると主張した奥野健男は、「文学における原風景」(1972年発表)の中で総ふるさと化(あるいは総郊外化)時代の文学に対して次のような不満を述べている。

「(略)彼ら(著者注:後藤明生や黒井千次達)は人工的な団地やニュータウンや高層マンションがいかなる意味でも人間的、恒常的な自己形成空間や原風景になり得ないことを、また人間関係の変化を追求する固定し安定した座標軸になり得ないことを、つまり従来の意味の小説が成立し得ないことを証明している。それは後藤明生の『私的生活』『誰?』などの一連の団地小説、黒井千次の『走る家族』などの作品に象徴的にあらわれている。しかしこれらの作品の奇妙な不安定さやいらだちは先駆的文学が担わなければならない宿命的な悲劇と栄光と言えよう。(略)」(奥野健男, 1976, 214)

ここで取り上げられている後藤明生や黒井千次の作品は、1970年前後に発表されたものである。既述のごとく1960年以降の日本は未曾有の変化をとげ、即座に変化に対応するのは困難であり、文学も例外でなかった。奥野は、自己の歴史の記憶と共にある空間として自分の意識の中で変わらないものとして「原っぱ」を捉えているが、自己形成空間の回想に伴う湿った感覚が感じられる。ところが、1960年代以降は、奥野の意識に確たるものとして捉えられている「原っぱ」さえも消失させる大転換期を迎えた。

奥野が不満を述べた後藤明生の小説については、奥野からほぼ30年を経て川本三郎が取り上げている。あとがきで故郷との関わりを考えてみたかったと書いている後藤の『四十歳のオブローモフ』(1972年)では、作者とおぼしき主人公が団地の建物や人物を「人工的、抽象的な風景として見ている(川本三郎, 2006, 97)様子が描かれる。ここに見られるのは本稿で大転換期として捉えている時代を把握するための技法として身につけた「乾いた感性である」(川本三郎, 2006, 97)と川本は説明する。また、たまたま朝早く起きた埼玉県草加市の松原団地住民である「わたし」が青年の頃着ていたカーキ色の陸軍歩兵用の外套の行方を求めて、住まいのある松原団地から都内の蕨までの行程を上野を経由しながら、行ったり来たりとさまよう様を描いた後藤の小説『挟み撃ち』(1973年)についても川本の評価は同じである。後藤は、団地に住みながらそこに確たる起源を求めることができないために生活における合理性の基盤となる線形的な時間概念も失い漂流している者の意識を表現している。

4. 小林秀雄の「故郷を失った文学」にみる喪失感の由来—戦前：1930年代

1) 都会起源のエリートの増大

本節の主眼は、文芸批評家小林秀雄の「故郷を失った文学」を手がかりとして、彼に代表される当時の青年エリートの故郷喪失意識の由来を探ることにある。その前に1930年代の小林のように日本のエリートであった青年の位置づけを確認しておきたい。

中村牧子は、東京におけるエリートの故郷喪失意識は、当該個人に起因するというより、その家族の社会移動に規定されていることを秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』（東京大学出版会、2002年）のデータを基に分析している。中村の説明によれば、明治時代前半のエリートの故郷喪失意識は、中学校が偏在していたため立身出世のために高等教育を受けようとするれば、中学校がある都市に移動せざるを得ず、それも単身であったことに起因するといえる。しかし、明治後半以降は経済が発展したこともあって、エリートの父親は、明治政府の役人のみならず、当時増加してきたホワイトカラーであった。父親が都市の会社に就職した後、その家族は特定の都市に定着するか、都市間の転勤を繰り返すことになる。このような動きを反映してか、例えば、東京へ向けての流出は、単身流出型から一家流出型へと大きく変わってきて、その結果徐々に東京育ちの青年が多くなり、小林が「故郷を失った文学」を書いた頃は、彼らは特別な存在ではなかった（注7）。

2) 小林秀雄における故郷喪失の意味

小林秀雄は、東京の下町である神田で育った。かつては東京（江戸）の代表とまで称されていた神田は、明治以降その地位が低下する。理由の一端は、明治政府の薩長出身官僚が開拓地である山の手へ居住したことによる。時の政府の有力者が住む山の手に対して、以前は中心地であった神田等は「下町」と呼ばれるようになった。

歴史性を考慮した東京の山の手と下町の空間的特徴をについて、陣内秀信は次のように整理している。

「東京の成り立ちを歴史的な視点を導入しながら調べていくと、この町は本来、すぐれた都市の環境や景観をつくる条件に恵まれていたことがわかってくる。山の手は起伏に富んだ豊かな地形を誇る緑の町だったし、下町はデルタを造成してできた掘割の巡る水の都だった。世界でも類例のない坂と橋が無数にある町、それが東京なのである。」（陣内秀信、2007、249）

東京は、明治の中期に入ると急激に近代化する。1900年代初頭の東京西部の開発が進行する様子や山の手の開発の様相について、前田愛は夏目漱石の『三四郎』（1909年）、『それから』（1910年）、『門』（1911年）の初期三部作や田山花袋の『東京の三十年』（1917年）等を基に論じている（前田愛、1992、415-442）。さらに、関東大震災（1923年）後の開発計画で、東京の東部の方が工場用地として位置づけられ、それに近接する住宅地への需要で東部へ一層拡大し、下町と呼ばれる（注8）。このように近代都市として発展する東京は、西欧近代の文物が流入する最前線であった。東京においては、地方からのいわば共同体から解放されて流入してきた人口が多く、また、企業で働く人々の合理性（効率性）の追求や

個別化現象もみられ、第1節の小林敏明のまとめによる理念で示される西欧近代が実現していた。

小林秀雄は、1933年に「故郷を失った文学」を発表している。第1節で述べたように、小林には故郷の観念がなく、それが自分を不安にしていると書いている。この作品については評価が分かれている。好意的な評価は、神田という故郷を失った小林が、西欧近代に故郷を求めることにより自らを位置づけたというものである（注9）。故郷を失ったがゆえに「孤立した自己」を求める小林秀雄というふうに見立て、近代的精神を称揚する先導者として評価するものである。

三浦雅士の「故郷を失った文学」に対する評価は厳しい。しかし、三浦が規定するように小林が「青春」をテーマとする文芸批評家であるならば、これは当時のエリート青年の意識を示す資料として見ることができる。成田龍一の次の記述は、小林に対する正当な評価であるといえよう。

「小林は、「故郷」を「思い出」のある場所—原風景や始原の場所として把握するが、「故郷」をもたぬ自らを、あらゆる現実的なもの＝根拠を喪失し、「不安」のただなかにいるといい、作意—「主観上の細工」によってそこから回復しようとする。（略）」（成田龍一、2000、240）

小林秀雄は、近代人として個別化する状況の中で自己の存在証明（アイデンティティ）のゆらぎに遭遇し、いわば魂の拠り所を求めて流浪するフランスの詩人（ランボウ）に自分自身を重ねた。この時期の小林がとった対応について、佐藤正英の興味深い指摘がある。

「小林は、ランボウの詩に出逢うために、雑踏に行く群衆にまじり、群衆に身をさらすべく、街なかをうろつかななくてはならなかった。雑踏に行く群衆にまじり、群衆に身をさらすことは、現前する家郷の在りようにかかわる小林の心象を喚起させた。縁取りの明確な故郷を失った小林にとって、雑踏に行く群衆にまじり、群衆に身をさらすことは、それと意識されていたか否かはともあれ、現前する家郷の在りようを自身に即する形で対象化するほとんど唯一の手がかりであった。」（佐藤正英、2008、103）

佐藤は、この街なかを「最小限の辺境世界」（佐藤正英、2008、103）と位置づけている。かくして小林秀雄は、自分自身が徘徊する匿名性の強い街なかを自らの思考（文芸批評）を展開する地平とすることにより近代人として直面せざるを得ない問題に挑んだ。

3) 諸近代の近代

都会人および農村出身のエリート青年の故郷喪失意識を議論するには、彼らにとり理念であった「近代」という言葉が二重の意味を帯びていたことに留意する必要がある。この点を彼らの多くが学んだ東京の占める特別な位置からみてみよう。鹿野政直は、東京の独自性を次のように説明する。

「（略）東京が西欧文明の窓口であったせいでもあり、また、文明の姿を借りる列強の資本が、圧倒的な力をもって、自生的な産業をほろぼしていったせいでもあった。すさまじいばかりの中央志向は、東京をとおしての西欧志向をあらわしていた。

その姿勢は、中央対地方、表日本対裏日本、都会対田舎、そうして舶来対国産という二極分解を促進していった。その意味で帝都東京の成立は各方面に「辺境、をつくりだす触媒の役割をはたした。(略)」(鹿野政直, 1986, 172)

近代とその辺境という視点は、小林敏明も強調している。この視点に従うと、明治以降、目標としての西欧近代、西欧の文物を輸入し地方に普及させる位置にある東京、それ故に辺境の地位に追いやられた地方という「西欧>東京>地方」の序列が作られたことになる。したがって、辺境である地方の青年にとって、東京に出て成功することが大きな目標となる。他方、近代の象徴である東京に住む青年は、地方出身の青年に対しては優越であるものの、近代の基である西欧に対しては、劣等の意識を持つという二律背反な意識状態に置かれた。これは、西欧を先進とし、それを目標として進む国々を後進と捉える場合に発生する問題である。

理念型としての西欧近代と日本の近代とに区分することは、例えば日本以外のアジアの国々を想定すると、アジア諸国のさまざまな近代が存在することになる。大橋良介は、近代を西欧近代として一元化するのではなく、さまざまな近代があることに着目する必要性について「諸近代の近代」(大橋良介, 2009, 204)という表現を用いて説いている。この視点に立つと、「西欧>東京>地方」といった序列としてではなく、「西欧, 東京, 地方」というようにそれぞれについて近代があることになり、日本の中の辺境である地方の近代も想定できる。前項の佐藤の指摘にあるように、東京の街なかもまた一つの辺境であることからすると、既述のようにそれに自覚的であった小林秀雄は、西欧近代を自己の他者として思考しうる地平を獲得していた。

ここで注目したいのは、小林敏明が辺境の辺境である地方の出身者の思考が転じてフロンティアになる可能性を、第1節で近代の特徴の一つとして記した西欧哲学の主客分離の認識図式そのものの捉え返しにあると論じていることである。

「(略) 近代という時代においては、片や認識論の場面でのように **Subjekt** を **subjectum** (ヒュポケイメノン・基体) とみなす発想が登場するのと並行して、ちょうどそのペンダントをなすように、もう一方で自然科学の場面を中心に **Objekt** の方を **subjectum** とみなす発想が出てきて、その両者が競合しあうようになる。廣松の言葉を借りて言えば、まさにこの「**Subjektivismus** と **Objektivismus** との相補的な対立」そのものが「近代的な世界了解」の「図式」ないし「地平」を形成するのである。だから近代批判はこの両面に向けてなされなければならないということになる。」(小林敏明, 2007, 65)

本稿の議論の範囲を超えるが、小林敏明が取り上げる地方出身者の哲学的思考は、西田幾多郎の「絶対無」や廣松渉の「四肢構造論」である。

5. むすびにかえて

本稿では、長谷部正 (2006)、長谷部正 (2008) で記述した世界大戦後の経済の高度成長過程で都市社会が出現して日本国中がふるさと (あるいは郊外) とみなすことができる総

ふるさと化（あるいは総郊外化）という現象が、歴史的な観点からすれば明治時代以降の目標であった西欧近代化の達成を示すことを論じた。このことは、同時に、本稿で風景論の観点をも加味して論じてきたように、三浦雅士が主張する明治の前半から小林秀雄のようなエリート青年の中心テーマであった「青春」やそれと結びついた「故郷」等といった観念の終焉を迎えたことを意味している。

見方を変えて西欧近代の文物輸入の窓口であった東京に着目すると、高橋勇悦が東京人の特徴とその歴史を論じた上で次のように述べていることに重なる。

「江戸っ児」の気風が形成されるまでには100年以上の年月を要したが、その「江戸っ児」の気風は、徐々に希薄になったとはいえ、100年以上も息づいてきた。」(高橋勇悦, 2005, 19)

高橋は、永らく継続してきた「江戸っ児」の気風の今後がどうなるのかについて1960年代を境として論ぜざるを得なくなったと述べている。このように1960代は、明治時代以降、いや江戸時代以降の大転換の時代であり、本稿で強調した「総ふるさと化」（あるいは「総郊外化」）は、その歴史的な大転換という出来事を表す言葉である。

ただし、故郷は国民国家と結びついた観念でもあり、最近の例としては東日本震災後の「故郷」の強調にみられる。東日本大震災のような国民国家にとって特別な状況になると、故郷の観念は国民の意思統一の役割を担わされることを忘れてはならない。

注1) 以下の説明は、岩村暢子(2010)に依る。

2) 以上の説明は、見田宗介(1999)を参考にした。

3) 以下は、中村牧子(2005)の説明に依る。

4) ここでの説明は、輪島雄介(2010)による。

5) 以上の説明には、長谷部正(2006)、正(2008)を参照のこと。

6) 詳しくは、長谷部正(2008)を参照のこと。

7) 以上の説明は、中村牧子(2004)による。

8) 東京の山の手と下町の変遷に関しては次の高橋勇悦の説明がある。

「(略)江戸時代の下町とは、ほぼ神田・日本橋・京橋を中心とした地域(新橋から神田筋違橋までと、隅田川から外堀まで)であったが、明治20年代、浅草、下谷が下町に加えられ、関東大震災後に深川や本所が下町に加えられた。昭和初期から20年にかけては、向島(本所の東北隣)や城東(深川の東隣)が下町として急成長した。さらに、第二次大戦後は、足立、葛飾、江戸川が下町に加えられたようになった。一方、江戸時代、山の手は、旗本衆・御家人の武士が多かったようだが、「四谷、青山、市ヶ谷、北は小石川、本郷をすべて山の手」と言ったらしい。明治以後で言えば、山の手は、麴町、麻布、赤坂、四谷、牛込、小石川、本郷であり、関東大震災後に大森、世田谷、中野、杉並などが山の手に加えられたようになった(石塚裕道『東京都の百年』1986、小木新造・他編『江戸東京学辞典』1987)。(高橋勇悦, 2005, 4)

9) 「杭州から南京」において、小林秀雄は「はっきりとした故郷を持った僕等」(小林秀雄, 2002, 383)

と記している。ここに日中戦争を前にした小林の「転向」表明をみようとする議論もありうるが、本稿の主題を超える問題なので言及しない。

参考文献

- 藤井淑禎(2003)『景観のふるさと史』教育出版.
- 長谷部正(2006)「ふるさと歌謡との農村風景の変化」『舞台評論』Vol.3, 50-54.
- 長谷部正(2008)「郊外の風景とジャスコ化する身体」『感性哲学 8』97-113.
- 岩村暢子(2010)『「親の顔が見てみたい!」調査 一 家族を変えた昭和の生活史 中公文庫』中央公論新社(初版 2005).
- 陣内秀信(2007)『東京の空間人類学 ちくま学芸文庫』筑摩書房(初版 1985).
- 鹿野政直(1986)『日本近代化の思想 講談社学術文庫』講談社(初版 1972).
- 加藤典洋(2000)『日本風景論 講談社文芸文庫』講談社(初版 1990).
- 川本三郎(2006)『言葉のなかに風景が立ち上がる』新潮社.
- 小林秀雄(2001)「故郷を失った文学」小林秀雄『小林秀雄全集第二巻 Xへの手紙』新潮社, 366-375.
- 小林秀雄(2002)「杭州から南京」小林秀雄『小林秀雄全集第四巻 文芸批評の行方』新潮社, 377-395.
- 小林敏明(2007)『再発見日本の哲学 廣松渉一近代の超克』講談社.
- 前田愛(1992)『都市空間のなかの文学 ちくま学芸文庫』筑摩書房(初版 1982).
- 見田宗介(1999)『現代社会の理論 岩波新書』岩波書店.
- 三浦雅士(2001)『青春の終焉』講談社.
- 中村牧子(2004)「もう一つの故郷喪失—近代日本エリートの教育移動からみる」『埼玉学園大学紀要(人間学部篇)』No.4, 107-120.
- 中村牧子(2005)「戦後日本の故郷喪失と地域の変容—「自助」問題を巡る考察」『埼玉学園大学紀要(人間学部篇)』No.5, 205-218.
- 成田龍一(1998)『「故郷」という物語 都市空間の歴史学』吉川弘文館.
- 成田龍一(2000)「都市空間と「故郷」」成田龍一他『青弓ライブラリー9 故郷の喪失と再生』青弓社, 11-36.
- 大橋良介(2009)『日本的なもの, ヨーロッパ的のもの 講談社学術文庫』講談社(初版 1992).
- 奥野健男(1976)「文学における原風景」奥野健男『奥野健男文学論集 3』松岳社, 209-367.
- 佐藤正英(2008)『再発見日本の哲学 小林秀雄—近代日本の発見』講談社.
- 高橋勇悦(2005)『東京人の横顔 大都市の日本人』恒星社厚生閣.
- 輪島祐介(2010)『創られた「日本の心」神話 「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史 光文社新書』光文社.